

お互は向伐に関して益、思索を深め思想を豊富にし向伐形式に関する片よつた見解を根本的に更める必要がある。雑々式、何被式という様な窮屈なもの、考え方は之を省略し得べき小敷という段階にまで思想を進展させねばならない。そして向伐に関する学術技術を向上させ知識を普及させねばならないと私は思う。

向伐のことは今後益、重要な問題になると思いこゝに敢て愚見を陳べて諸賢の御批判を仰ぎたいと思ふ次第であります。

施業に立脚せる新式間伐法について

加治木宮林署 森村 邦太郎

従来の間伐法は型式的間伐法とも称すべきもので、樹型級区分に基き間伐の種類即ち型を定めたものである。斯かる型式的間伐法は手廻し林分にして一級木、三級木を殆ど欠除せるものに対し適用することはどうしても無理である。

そこで型式を離れた向伐法を考え、先づ第一表に示す様な向伐実行と準拠すべき三要項を定め、一方収養表或は当該林分の調査等に基き、更に又此の三要項を考慮に入れた当該林分に最適な伐採率を定め、その伐採率を基準として頭に置きつゝ、三要項に準拠して向伐を進めるという方法を案出したものである。然して伐採率は与えられた林分に対し最適なものは一つしか考えられないので、従来の様な向伐の種類(A種乃至D種)というものは、本法に於てはあり得ないものとする。

第一表 向伐実行と準拠すべき三要項

I. 林木の生理生態に関連するもの
1. 樹冠状態の改善 → なるべく樹冠の良いものを残し且つ、葉が改善される様に疎開する
2. 上長肥大両生長の促進 → 鬱閉林分に於ては肥大成長が上長成長に関連がある故に良いものを残存する。
3. 急激なる疎開による皮焦その他の生理的障害を防ぐ → 向伐後の残存林木各個の環境を考察し障害が起らぬ様注意する(特に林縁木、双生木)。
II. 林分の生理生態に関連するもの
1. 急激なる炭化を与えぬこと → 繰返し年表2年前位までに回復し得る程度の疎開、林養の保持、林木配置の平均。
2. 林地の肥沃度増進 → 雑草の繁茂を抑制し、湿度の適度の保持を図ると共に落葉分解を促進

心、酸度を低下さす。

3. 環境により伐採率を加減する → 傾斜の方向、林分の広狭、谷向と峯筋、風雪の強弱多少等

Ⅲ. 施業上の要請に関連するもの

1. 空間並に土地の経済的利用 → 次の項目と密接な関連がある。出来得れば伐採率を低め、繰返し年度を早める。

2. 繰返し年度の決定 → 樹種、立地、樹齡、施業の集約度に関連して定める。5~10年を普通とする。

3. 形質良き林木の育成 → 立木度の適度、林木配置の平均。

長期間に於ける林木並に林分の変移を予想し、全体的に且つ大局的に考へて窮極に於て目的に合致するよう実行する。

以上が本法の概念であるが、觀念的には従来のものと根本より異なるものとも云うべきで、新式とは斯の意味に於て名付けたものである。本法は差当り針葉樹の一斉林分で、且つ普通一般の施業を行う林分に適用するものであるが、その範圍内に於ては林分の構成状態とか、林木個々の關係的立ち具合等は、本法が形式を離れておる方法であるため、如何採ぐあつても構わないもので、つまり極めて普遍的なものである。

本法に於ては材積と伐採率を極めて重視するものである。その根拠は樹冠面積と材積とが極めて高い相関々係にあることにあり、材積の伐採率をば林冠の疎密度を測る尺度として用いることは熟考の深いものと考えられる。樹冠面積と直径との間にも正の高度の相関々係が成り立つので、伐採木選定者は、適度には直径を目安として、伐採率に合う杯に選定を進めるを便とする。

次に三要項並に其の中の各項目は、何れも同じ重きに於て考へらるべきものではあるが、林木の生理生態に関連するものうち、樹冠状態の改善を行うに当り、樹型級区分ということが必要となつて来る。樹型級は林木の經歷を表現し、又將來の成長に重大な関連を有つもので、一本々々の伐採木選定の基準として直接の目安となるものであるから、仮令それが区分の明瞭ならざる林分に於ても、標準として定めておく必要を認めるものである。そこで本法に於ては、従来のものが符号を用いその説明を暗記することの煩瑣不便を除くため、又樹型区分は、樹冠級と幹級とに分析して考へると林木の生理生態に関する統計学的研究等に何れも便利でもあるので、意字である漢字を用いて、名称がそのまゝ性質を表わす杯に且つ記憶し易い第二表の如き樹型級区分を用いることとする。然して本法に於ては、樹型級区分が伐採木選定上の絶対條件でないこと勿論ではあるが、樹型級区分表に於て「処置の廢略」欄に示した如く大体草擬して行うこととする。

本法は型式的間伐法と異り、植物の生理生態等、造林学、森林經理学、統計学等関連あるあらゆる科学を基礎として、無限に發展の可能性を有するものであり、例えば従来の型式的間伐法に於ては、寺崎博士の如き、伐採率は殆ど向應にせざる處であるが、実際には型式をそのまま適用できざる場合が多いために、一般には間伐実行に際し、或程度考考的に伐採率を考慮してはいるが、それは單に經

驗的に示われておるにすぎない。本法に於ては当該林分の成長率を知り、成長率に適當とする繰返しの年数を乘じて、即ち仮りに30年生のスギ林分の成長率を6%、繰返しの年数を5年とすれば、30%の伐採率を得るといふ如くなるのである。

本法は未完成のものであるが、本法に関心を有られる各位の御助力を得て完璧の域に達せしめたいものと念願するものである。

第二表 樹型版(Baumklasse)区分一覽表

I. 優勢林冠層		[従来の幹級区分との対照]	[処理の概略]
Kronenklasse	A. 満冠樹		
	1. 中蘗木(中正木)	1	なるべく伐らぬ。
	2. 過強木	2a	配置関係にて伏る場合もあり 伏らぬ場合もある。
3. 過弱木	2b		
Stammklasse	B. 欠冠樹		
	1. 中蘗木	2c	全上
	2. 過強木	2a	
3. 過弱木	2b	なるべく伐る	
	C. 畸形木	2d	強度なものは全部伐り軽度なものは場合により伐り又は残す。
	D. 枝翳木	2e	
II. 劣勢林冠層			
	E. 選育木	3	配置関係にて伐り又は残す。
	F. 被圧木	4	林地保護上活用できるものは伐らぬ
	G. 瀕死木以下	5	利用可極なものは伐る。

しいたけ栽培について

佐伯宮林署(白井担当区) 小中島 深田千代

しいたけ栽培については既に権威者の方々より幾多の研究が発表されて居りますが、私は之を分けまじて、(1)しいたけ原木林の育成(2)移種の形式(3)菌種の選択(4)菌糸を入手より培養完了迄の保存法(5)原木林の選定と樹令(6)原木の伐倒時期(7)玉切時期(8)培養(9)原木の搬込み方法(10)搬込み中の管理(11)培養場の選定(12)搬出し作業(13)しいたけ採取(14)しいたけの乾燥及時段(15)原